

BORROWED TIME

ボロウドタイム (下)

ポール・モネット
永井 明＝訳

時空出版

BROWED TIME

ボロウドタイム (下)

ポール・モネット
永井 明＝訳

〈訳者略歴〉

永井 明 (ながい・あきら)

1947年 広島県生まれ

1973年 東京医科大学卒業
大船共済病院・内科研修医

1979年 モントリオール大学国際ストレス研究所所員

1981年 神奈川県立病院内科医長

1983年 同・退職

以後、現在にいたるまで医療ジャーナリスト

主要著書 『はくが医者をやめた理由』正・続 (平凡社), 『医者が尊敬されなくなった理由』(飛鳥新社), 『仕組まれた恐怖』(講談社), 『ストレス自己診断』(講談社), 『ボクが病気になった理由』(平凡社), 『もしも病気になったなら』(岩波書店・ジュニア新書)

ボロウド タイム (下)

一九九一年三月二〇日第二刷発行

著者 ポール・モネット

訳者 永井明

発行者 藤田美砂子

発行所 時空出版

〒112 東京都文京区小石川四一八二三
電話 東京〇三(三三八二二)五二二三

印刷所 あづま堂印刷

ISBN4-88267-007-0

©1991 Printed in Japan

落丁、乱丁本はお取替え致します

セントルイス経由の長いフライトだった。機内は込み合い、ターミナルの混雑にひるみ、何度もその場から逃げだしたくなった。生き物の表面にできるだけ触れないようにすること以外、うごめく夏の黴菌の集団から身を守る方法はなかった。オヘア空港にはアルとバーニスが出迎えにきてくれていた。そして、家に向かう途中、わたしたちはスコキーのデリカテッセンに立ち寄った。彼らは、ロジャーがとても調子がよさそうに見えるのに驚いていた。春の肺炎からほんとうに回復したのだと安心したようだ。ロジャーとわたしは、穴蔵部屋の折りたたみ式ベッド、キャンプのときに使うような一インチほどの薄いマットレスの上で眠った。七五年、カリフォルニアに行く途中、この家に立ち寄ったとき、彼らは、わたしたちが恋人同士であることがわからなかったので、ふたりに別々の部屋をあてがった。だが今度は違う。わたしは家族だった。

わたしたちは頑張つて早起きし、ジェイミーとマイケルの家に行った。おじさんを迎えた子どもたちは興奮し、大騒ぎだった。六歳のアンドリューはテザーボール（柱からひもで吊り下げられた球をラケットで打ち合うふたり用のゲーム）でわたしを負かした。ロジャーに無理をさせたくないため、わたしが彼のお相手をおかしてでたのだ。ミシガン湖をクルージングするため、マイケルが友人のボートを借りる手はずを整えてくれていた。わたしたち八人全員は、アルのキャディラックに乗り込み、街のマリーナに向かつて車を走らせた。四歳のライザはロジャーのひざの上に座り、楽しそうに笑い、おしゃべりをしていた——わたしは、子どもたちにロジャーの目の前で呼吸させないようにすることをあきらめた。だが、そのわたしさえも、クリス・クラフト号が動きはじめたときには、すっかりくつろいでいた。ロケットのような外観を持ったそのボートは、三〇フィート（約九メートル）の大きさで、六人分の寢室があった。

わたしたちは瑠璃色の湖をめざしていた。その日は涼しくて乾燥した天気の良い日で、シカゴ特有の息のつまるような湿気はなかった。マリーナを出て行く途中、波が立ちはじめると、突然アルは手すりを握りしめた。そして、マイケルに引き返すように頼んだ。六〇年前に兄が溺れ死んでいため、水深のあるところになると恐慌をきたすのだった。だが、家族がお互いの不合理なことに対処する独特なやり方で、みんなは優しくアルの不安に気づかないふりをした。少しすると、アルの恐怖心はしだいにおさまリ、一〇分後には老練な船乗りのような穏やかな表情になった。そして、

彼の二世代にわたる子どもたちを見て、にこにこはじめた。

ロジャーはとても楽しんでた。しわくちやの水兵帽をかぶり、カメラに向かって歯を見せて笑っているロジャーの素晴らしい写真がある。その写真には、病気を思わせる兆候は何ひとつない。彼は、ふたたび完全に回復したように見える。スラミン治療を受けたあとの土曜日、彼は眠気と熱に一日中つきまとわれたが、その日はまったく何の症状もなく、元気にはしゃぎ笑っていた。みんな、ロジャーは大丈夫だと感じていた。彼はジェイミーの横に座って話していた。ふたりは、波のうねりに声がかき消されないよう近寄り、腕を折り曲げて風の攻撃に対抗していた。彼らはまさに兄と妹だった。ほかにいいようがなかった——少し年上の兄、彼の話に一生懸命に耳を傾けている妹。この記憶が鮮明なのは、たぶんアンドリュースとライザを見たからだろう。彼らはまさに、ロジャーとジェイミーの縮図だった。帰路、長いあいだ狭い場所に押し込められていたので、子どもたちが落ち着かなくなってきた。グレンコーに向かっているあいだ中、彼らふたりは車のなかでとびはねていた。両親や祖父母はこの手の騒ぎに慣れていたが、ロジャーとわたしは未婚の伯母のようにぐったりとしてしまい、子どもたちが居眠りをはじめのを待ちきれなかった。

シカゴではこれといって悲しいときはなかったが、ただ、日曜日の朝、朝食のために身仕度をしているとき、ロジャーは頭を振りながら驚きを率直に口にした。「ぼくはもう若くないんだ」。わたしはむろん泣きはじめた。その言葉が空きっ腹にこたえた。彼は老けて見えなかったし、歳をとっ

ているとさえ感じなかった。彼がそんな気分になったのは、たぶん実家を訪ねたこととある程度関係があったと思う。そこでは、ひとはいつも、隣の部屋で遊んでいる、過ぎ去ってしまった子ども時代の自分と微妙に調子が合ないものだ。その瞬間がとりわけ辛かったのは、ロジャーが、いつもどんなに少年ぽかっただろうかと思つたからだ。一緒に過ごした時間の半分、わたしたちはまるで一二歳の少年のようで、いつも修学旅行のようだった。彼には、成績がオールAの七年生のエネルギーといったずらのセンスがあつた。そして、たまに学校をさぼるという、可愛らしい反抗心も同時に持ちあわせていた。わたしは陰気で堅苦しい、年寄りのような子どもだった。彼と一緒に初めて、子どもになることができた。だから彼が、自分の青春は終つたといったとき、ヘンゼルとグレーテルのように手をつなぎ、ふたりの子どもが森のなかに消えて行つてしまうように思えたのだ。

日曜の午後、アルとバーニスと一緒に街をドライブし、ダウンタウンを長い間歩き回つた。アルはロスがきらいだったので、大好きな自分の街、シカゴへのプライドを爆発させた。レストランH&H（アル所有のレストラン）が以前あつた場所を通つたとき、彼らがヨーロッパに行つてゐる数週間、ロジャーがその店を取り仕切つたことを話して、彼らは笑つた。それからアルは、街のあちこちにある屋外の彫像、ネヴェルソン（アメリカの彫刻家。ジャンク・アートの代表的存在）からデュビュフェ（フランスの画家。絵具に砂、石灰などを混ぜるオート・パート技法で有名）までを先頭きつて案内した。彼はまる

で、それらの所有者のひとりであるかのように、それぞれの彫像を誇らしげに見せた。

ジェイミーの家での夕食のあいだ、マイケルは横に座っている彼女に尋ねた。「どうしてポールは母鶏のように、いつもロジャリーのすぐ近くにゐるんだい？」そして、あとでわたしにも聞いた。「何か悪いこともあるんじゃないのかい？」

その夜、ロジャリーのユダヤ教成人式のときの写真を見せてくれるように頼むと、バーニスは喜んでアルバムを引っぱり出し、ダイニングルームのテーブルの上に置いた。それまでわたしは、子どもの頃の彼を見たことがなかった。彼は一三歳、くったくのない笑顔をしていた。そして、フリルのいっぱい付いたパーティードレスを着ているジェイミーは、とてもおてんばそうに見えた。一九五〇年代半ばのページは、すべてが樂觀主義に満ちあふれていた。そこには、ロジャリーやわたしとほとんど同年代の人びとが写っていて、お互いに腕をまわし、カメラに向かって歯をみせて笑っていた。「彼は死んでしまったわ」バーニスは淡々とした調子でいった。写真に写っている何人かを指差しながら「彼女も死んでしまったし、彼も……」

月曜日の朝、わたしたちはこの訪問、家族というものの、少なくともシカゴの親類に満足して空港に向かった。ポストンに向かう途中でわたしは泣き出した。

報告できるような幸せなことはわたしには何もなく、ただ次々に、ひどく醜い話ばかりをしようとしていたこと。とても悲しくて、望みを絶たれてしまったことを。

しかし、わたしの両親とロジャーのあいだには、お互いを思いやる気持ちがあったので、彼らについては心配していなかった。カリフォルニアに移ってから、わたしはひとりで両親を訪ねたことがある。ロジャーのいないアンドーヴァーでの日々は、わたしをまるで籠の鳥のような気分にした。ロジャーがアルやバーニスと楽しんでいるような成熟した関係を、わたしは両親とのあいだにまったく持っていなかったのだ。わたしはそのことがとても気になっていた。彼らがかつてゲイに關してだいていた見当違いの考え、息子が作家になったことの苦惱（「ものを書くのはいいけれど、おまえはいったい何を、つもりなんだい？」）について、わたしはこだわっていた。

それにもかかわらず、彼らはとても品行方正で慈悲深く、よき隣人を持った根っからのヤンキーだった。わたしを軟膏のなかに落ちたハエのような気分させるのは、いつも、母親のキリスト教への熱情だった。それは、わたしたちのあいだに長く立ちはだかっている問題だった。ヘビや舌〔保守的で攻撃的なキリスト教者の比喩。ヘビは叩く武器、舌は宣教師の外国語の意〕や、タミー・フェイ（テレビ説教師。保守頑迷で知られている）ではない。わたしたちが話しているのは、低^{ロウ・エビスコパール}英国国教会派（聖職者の特権や教会の政治組織などを比較的軽視する一派）についてだ。アンドーヴァーのキリスト教会は自由を広める源とし

て、非の打ちどころのない確信に輝いていたが、母親が会話のなかに神をちらちら持ち出すから、もうけっこうという雰囲気になり、わたしはそこから距離を保っていたのだ。それでも、ロジャーとわたしが一緒にいることが長ければ長いほど、わたしたちは家族としての癒しを増していった。わたしたちのどちらもが、お互いを見いだしてはじめて家族にほんとうのことを話したというのは、偶然ではないと思う。ひとりでは、のべつまくなしの陳腐な決まり文句を聞くのは耐えられない。それなら、ゲイであることを隠していたほうがよほど気楽だ。だが、心の奥底でルームメイトを求めている声を、長いあいだ、ただ聞き続けていることもまた、不可能なのだ。

最初の日の夕食のあと、ロジャーはからだを休めるために二階に上がった。わたしは両親と、エイズについてかなり長いこと話した。彼らは、それがわたしたちに感染することはあり得ないと考えていたが、エイズという病気についてはかなりよく知っていた。そして、わたしがシーザーの話をしたとき、彼らの落ち着いた気持ち揺らいでいくのがわかった。

火曜日には、ロジャーを連れてフィリップス・アカデミーに行った。そこは、ハイスクール時代にニキビの存在に耐え、のちに教師として、ゆらめく五回の夏を過ごしたところだ。わたしは、アートギャラリーの前の広い芝生の上に座っているロジャーの写真を二枚撮った。その二枚はいま、わたしの手元にある。彼の腕はひとを包み込むように大きく広げられ、喜びに満ちたほほ笑みを浮べている。背景には、夏の湿潤な緑におおわれた榆の小道、空は乳白色で、手で触れることができ

るかにみえる。わたしたちはコ克蘭鳥類保護区に入つていった。その場所は個人所有の森のように塀で囲まれていて、わたしが若い頃、冬に夏に、何度もひとりで散歩したところだった。わたしたちは池の方に向かい、石橋の上に腰を下ろした。小川は、藻をありながらゆっくり流れていた。わたしたちは、それまでふたりがしてきたことすべてについて、そして、それらがどんなに素晴らしかったかを静かに話した。そのとき、ロジャーは樹々を見上げ、声をつまらせた。「でも、ぼくが死んだら？」

「君は死んではないよ」わたしは十分に気持ちをこめて言葉を返した。彼の質問にちゃんと答えてはいなかった。でもそのときは、それしかいふべき言葉がなかったのだ。「ぼくたちはここに、いる。そして勝つんだ」

わたしたちはその道の先頭に立てるはずだ。そのとき、わたしは完全に信じていた。すぐに新しい抗ウイルス性物質が開発され、希望があふれるように押し寄せてくるだろう。わたしたちは、他のひとたちに、いかにして喜びを運んでくるかを示すためにそこにいるだろう。ロジャーの質問に対し、いまではもちろん限りなく悲しいキーツ〔英国のロマン派後期の詩人〕風に答えることはできる。しかし、気持ちが高ぶった瞬間には、ほとんどどんな言葉も出てこなかったのだ。八月半ばの鳥の聖域は夏の盛りで、生命力にあふれ活気づいていた。キリギリスがアリを笑うのも、当然かもしれない。その後一度だけ、わたしはその石橋の上に立つたことがある。ロジャーが死んで三週間後の

ことだ。雪と寒さ、空はドライアイスのようにけむり、歌う鳥もいなかった。

両親は、わたしたちをメイン州のヨーク・ハーバーに夕食に連れて行くことにしていた。そこは、ヨーク河口の近くにある、彼らのお気に入りの場所だった。ハーバーに着いたとき、父と母をレストランにおいて、ロジャーとわたしは夕暮れの空気を吸いに海岸へ出た。わたしたちは入江まで歩いて行った。エーゲ海とは反対で、緑と青のよい戸に白い屋根、百万長者の夏の別荘だ。ロジャーは数フィート離れ、潮風を嗅ぎながら砂浜に立っていた。わたしは海に手を入れ、水をかき回した。

一ドル銀貨大の灰色の石を手にしてわたしが戻ってきたとき、彼は喜びにみたまされたような表情をしていた。わたしたちはブルーストと彼の祖母、バルベックの海景の絵様帯（フリイズ）「失われた時を求めて」第一編「スワン家のほうへ」に記述されている。仏・ノルマンディ地方バルベックの、海辺のホテルの部屋に備えられたマホガニー製の書架のガラスに海景が映ってフリイズのように見える」について話した。わたしは、ずっとメイン州が嫌いだった——とても寒く、あまりにもワスプ風で、瞬きしているうちに夏が終ってしまふからだ——だが、その日の北極光がこの上なく美しかったことを認めないわけにはいかなかった。そしてわたしは、彼と一緒にいたから、その素晴らしさを満喫することができたといった。彼がまだ生きているということを、とくに意味したつもりはない。両親と一緒になら、その半分も楽しめなかっただろうといったかったのだ。ひとりだけなら、最悪だ。人生を三回くり返してもまだ続

くような、そんな孤独な絶壁の上に立つような気分だろう。しかし、わたしの言葉を聞いて、ロジャーの目から涙がわき出してきた。わたしは自分の愚かさを呪い、叫びたかった。彼を悲しませるつもりはなかったのだ。けれども、夕暮れどきはともうつろいやすく、目の前で刻々と変化する。わたしたちはまたすぐに元氣になり、より大きな共謀を促すかのように肩と肩をぶつけ合い、笑いながら海岸をあとにした。

水曜日、ロジャーは古い友人を訪ねてボストンへ行った。わたしは伯母のグレイスと昼食をとった。彼女は五年ほど前に夫を亡くしていた。以前よりもいまのほうが、夫を亡くした悲しみがもつと深まってきたと話していた。小さな町で、ふたたび罫にかかったような気がした。わたしは老教師のように去勢された状態で、午後のあいだずっと、ボストンのロジャーに電話をかけた。ロジャーはとても情緒不安定になっていた。彼はミリアム・グッドマンと昼食をとった。彼女はブランデイス以来の知り合いで、彼の人生のなかでは、わたしの先をいく詩人だった。でも、彼は彼女には告げなかった。それから彼は、トニー・スミスのところに行った。トニーの家は、ビーコン・ヒルのわたしたちの昔の家の角をまがったところ、ブリマー通りにあった。トニーはタフツ大学で政治学を教えていた。大学院時代、ロジャーのいちばん仲の良かった友だちのひとりで、唯一のゲイだった。トニーは肺炎のことについてたずねたが、それほど関心があるようにはみえなかった。ロジャーは超然とその質問を無視しようとしたが、思わず言葉にならない声をもらしてしまった。

レンジで料理していたトニーが振り向いた。「でも、元気なんだろう、違うのかい？」ロジャーは頭を振り、泣きだした。

わたしはその場に行き、彼らと一緒に夕方を過ごしたかった。たった三〇分で行けるところなのだ。しかし、夕食のあと、母親がひどいぜん息の発作におそわれたので、家でじっと待っていないければならなかった。横目で時計を見ながら、父とカードゲームをして時間をつぶしていた。そのとき、アルフレッドがロスから電話をしてきた。CBSが、わたしたちの作品を番組にしたがっているという。両親は大得意だった。わたしは、彼らの興奮状態を真似てからかっていたが、ロジャーのために、その良い知らせを胸におさめておこうと思っていた。その出来ごとそのものというより、彼にそれを告げることに興奮していた。彼が戻ってきたとき、どんなに驚くか楽しみだった。

真夜中過ぎ、緑のインクを流したような静けさのなか、わたしたちはふたりで裏口のポーチに出て座っていた。わたしは泣き続けていた。彼とまた一緒にいることができるのが、嬉しくてたまらなかったのだ。半日もひとりしていると、わたしは腑抜けのようになってしまう。この旅は、閉じ込められていた涙を一挙に噴き出させたかのようにみえる。とても多くのことが、わたしを悲しませた。あるとき、母親は、わたしがどんなに可愛らしい赤ちゃんだったか、とても幸せそうに言葉を尽くして回想してみせた。だがわたしは、そんなに遠い過去まで戻ることはできないと思っただけだった。両足にギプスをし、たくさんのおもちゃに囲まれた弟、スプリングフィールドにいた彼の

ことが、八歳か九歳だったわたしにはいつも気になっていた。そしてその頃、彼女は祖母の口癖をよくいつてきかせたものだ。子どもたちがベッドで安心して寝ていられるときが、いちばんいいときだと。木曜日、三〇年間寝起きしていた軒下の寝室で、出発のための荷造りをしていた。わたしは子どものように泣きながらロジャーにいった。「両親がぼくたちを助けられないから、ぼくは泣いているんだ」

帰りの飛行機は大幅に遅れた。激しい雷雨のため、ルートを変更してカナダに向かった。そしてそのために燃料が不足し、ラスヴェガスに臨時着陸しなければならなかった。空調なしの状態で二時間、滑走路に止まったままだった。密閉された空気は濁り、息が詰まりそうだった。実際にわたしは、微生物の臭いを嗅ぐことができた。

七時到着の予定が、けつきよく一一時になってしまった。それでも翌朝、わたしたちは一三回目の投薬のため、C R C（クリニック・リサーチ・センター）に出かけた。その日、アップルトンは具合が悪く、治療に来ないと聞いた。貴重な投薬のチャンスを逃すなんて、聞いたことがなかった。せつかくのベッドを空にしておくのは非道徳的にさえ思われた。しかしもし、下痢に苦しんでいるんだとしたら、どうするのだろうか？ スラミンが下痢を引き起すかどうか、触れられないままだった。その後ずっと、病気を理由にアップルトンはC R Cに来なかった。彼のでたらめさに、わたしはます

ます苛立った。

これと対照的に、ブルースは樂觀的だった。その病院について、わたしのほうが彼よりもはるかに詳しいことを知らないから、彼はCRCでの自分のアポイントメントについて、ことこまかに話した。この頃、CRCはスラミン研究を管理するためにスゼット・チャフィーという看護婦を雇った。わたしたち月世界の人間のあいだで、この元気のいい女性に関する噂話が長々と続いた。彼女は子どもの頃海外で過ごし、スイス——だったと思う——で働いていたから、ロジャーとわたしにとって、とても魅力的なヨーロッパ風のウィットを具えていた。さらに彼女は、わたしたちが熱狂する古代の船乗りの話にもめれるという新しいタイプの女性だった。その後彼女は、AZTの管理もすることになったから、わたしたちはスゼットとともに、長い道程を旅することになった。

八月の半ば、サンタフェからジョエルが電話してきた。レオはとても元気にやっているらしい。

彼らは、街を見下ろす高台の松林のなかに住み、ヴェジタリアンになっていた。幸運なことに、レオはロスのほかの病院でスラミンの治療プログラムに入ることができた。彼は毎週、投薬のために飛行機で行き来することになる。それにジョエルが付き添うつもりのないことは明らかだった。ポリアンナ（エレノア・ポーターの小説の主人公。盲目的な樂觀者）的な底抜けの楽天主義の元気な嵐のなか、ジョエルはとてもさりげなく、ぼくは陰性なんだよといった——それは、彼がウイルスに感染していないことを意味した。

これはとても陰險なやり口だ。なぜなら、そのつくり話はまるでシエラザード（アラビアンナイト物語の語り手。女性不信に陥った王に、毎夜巧みな話術でもって物語を聞かせ正妃におさまった）のようにうまくできすぎているからだ。「レオとぼくは絶対にフアックしなかったんだ。知ってるだろ？ だいたい、ぼくたちはほとんどセックスしなかったんだ」とジョエルはいった。彼はレオと別れる準備ができている。次の恋人を見つけたがっているのだ。恋人を求めている男は、自分の履歴を整理しておく必要があるというわけだ。

自分が「陰性」であることを告げるには、とてもたくさんのやり方がある。あるひとはあからさまに良心の呵責に苛まれ、相手を失望させたと感じる。わたしの抗体の状態についてインタビューされたあと、一度も会ったことのない男性が手紙をくれた。

先月、わたしの検査結果が「陰性」で返ってきたとき、わたしは予期せぬ悲しみに打ちひしがれました。生きて帰ってくるのは罪悪、おそろしい裏切り、避けがたい出発点です。

あるひとは興奮して叫び、他人が自分ほどにはスリルを感じていないことを忘れてしまう。とても恥知らずに喜んでしまうだろうから検査を受けない、という友だちも何人かいる。彼らは本能的な直感で、自分たちが「陰性」だと思っているのだ。それで、彼らはいったい誰をだまそうとして